

国際センター所長 中川眞 (大学院文学研究科教授)

国際化戦略本部に属する国際センターの役割は、他の4本部、すなわち研究推進本部、教育推進本部、地域貢献推進本部、産学連携推進本部から独立して存在するのではなく、各本部がかかえる国際化 이슈と係し、バックアップすることを旨としています。また、留学生や研究交流をはじめとする細かい事務業務も一手に引き受けています。さらに、将来を見据えて実験的な施策を企画・実行していく必要があります。今回は、ひとつの実験的な試みを紹介しましょう。それは、文理融合を見据えた若手研究者の国際交流です。

日本学術振興会 (JSPS) のプログラム「若手研究者招聘事業」によって、2011年の8月から10月にかけての3ヶ月間、アジア各国から博士課程の大学院生が18名来学し、フィールドワークやワークショップ、研究発表、パフォーマンスなど多彩な事業を、本学の教員や大学院生の指導・協力を得て実施しました。このコーディネートを国際センターが担いました。

JSPSプログラムの応募や実施は各研究科が担当しているのですが、今後の大学国際化にとって文理融合型の研究が重要であるという判断から、国際センターが両研究科に積極的に働きかけたのでした。

採択されたプログラムのタイトルは「アジア型都市創造性を確立する学術ネットワークと研究者の育成—文化・生態アプローチ」というものです。プログラムコーディネーターには文学研究科の仁木宏教授になっていただきました。本学が我が国における都市研究のトップクラスの拠点であることは周知の通りです。文学研究科は21世紀COEによって「都市における文化創造性」について研究を深めてきました。それはグローバルCOEとして都市研究プラザの「文化創造を通じた社会的包摂」という研究へと受け継がれ、特にアジアの都市研究との連繫を重視して、ガジャマダ大学 (インドネシア) やチュラロンコン大学 (タイ) という両国のトップ大学との共同研究やシンポジウムを開催してきました。JSPSの頭脳循環プログラム「アジア・アーツマネジメント研究機構確立のための若手研究者派遣・育成プログラム」に採択 (2010~2013) されたのもその経緯のひとつです。

しかし、文化創造性からのアプローチだけでは物足りない、環境・生態系の視点を導入することによって、都市の「息づき」をもっとリアルに捉えられないかと考え、理学研究科の植物科学領域の参画を求めました。理学研究科教授で附属植物園長である飯野盛利教授がこれに応え、文理融合型の研究チームができあがったのです。

招聘されたのは文系11名、理系7名です。文系の各テーマは写真 (チュラロンコン大学)、ファッション (チュラロンコン大学)、玩具 (チュラロンコン大学)、アジア音楽 (チュラロンコン大学)、障害者アート (ジャカルタ芸術大学)、ダンス (ジャカルタ芸術大学)、サウンドアート (ジャカルタ芸術大学)、インテリア (インドネシア芸術大学)、映像 (インドネシア芸術大学)、都市空間利用 (ガジャマダ大学)、都市文学 (ガジャマダ大学)、理系は

八丈島の生態（サラワク大学）、植物生態・多様性に関する調査研究方法（アンダラス大学2名、メジョ大学）、植物の環境適応機能（ハイデラバード大学、デリー大学、アンダラス大学）でした。

最長で3ヶ月弱、最短で2週間の滞在でしたが、個々人の専門的なプログラムとともに、共同のプログラムがたくさん組み込まれました。文系は杉本キャンパス、理系は附属植物園を本拠地としましたが、ときには全員が植物園に集合し、植物の生態に関するレクチャーを受けるとともに、ダンスや音楽の即興パフォーマンスを行い、植物園の風景の異化や利用可能性についての意見交換や実験を行いました。

10月の最終段階では全員が3日間杉本キャンパスに集まり、ワークショップや研究発表を熱心に行いました。文系研究者が提示した鮮やかな映像技術を、理系研究者のプレゼンテーションなどの効果的なツールとして用いることや、「**resilient**（弾力的な）」という概念を通した都市学構築の可能性について活発な議論を行い、キーワードとして共有されました。また、このプログラムに合わせて芸術文化振興基金（文化庁）から助成金を得て、パフォーマンス公演「異文化交流の最前線 - 境界のカラダ」を田中記念館ホールにて企画・実施し、ジャカルタ芸術大学の3名がダンスや音楽の創作を通して、自ら都市文化創造の担い手になりました。さらに、12月には理学研究科主催の公開講演「大阪市立大学植物園 - その全学的利用と更なる社会貢献をめざして」において、私は **JSPS** のプログラムの報告を行いました。

次のステップとして、アンダラス大学、ハイデラバード大学、デリー大学、ジャカルタ芸術大学と交流協定を結ぶための準備を進めているところです。小さな試みでしたが着実な第一歩であったと確信しています。この交流をさらに続け、大きな太い幹に育てていかねばと思っています。